【研究ノート　特集　立命館と戦争（立命館百年史を追補して）】

学徒勤労動員中における九人の犠牲者

史資料センターオフィス　齋藤　重

《はじめに―学徒勤労動員調査で明らかになった未完事項再調査》

立命館学園が一九四三年のいわゆる学徒出陣に関わる調査を行ったのは、一九九二年～一九九三年にかけてであった。一九九三年は「学徒出陣五〇周年」の節目にあたり、全国の大学と同様に本学園でも実態調査を行った（一）。

当時の「立命館百年史編纂室」（二〇一五年に立命館　史資料センターとして発展改組）は、一九九二年後期から学内諸文書を組織的に収集し、文科系学生の学徒出陣に関わる六冊の名簿を入手した。一九九三年八月この名簿を手がかりとして、予備調査アンケートを実施し、その回答を元に『立命館百年史紀要第二号』（一九九四年）に中間報告を、『立命館百年史紀要　別冊第二号』（一九九六年）にアンケート回答を含めた報告冊子を発行している。

立命館学園は戦後「平和と民主主義」を教学理念に掲げ、その具現化の一つとして一九九二年には、日本初の大学立・平和博物館「立命館大学国際平和ミュージアム」を設立した。当時の大南正瑛総長、安齋育郎

立命館大学国際平和ミュージアム館長代理（国際関係学部教授）らが先頭に立ち、世界平和フォーラムや学徒出陣五〇年にあたっての「私立大学総長・学長の共同声明」（一九九三年一二月）の呼びかけ人となるなど学園あげて平和の取り組みを行った(二)。

その一環として立命館大学における学徒出陣・学徒勤労動員におけるアンケート調査を行った。このアンケート調査は、「学徒出陣」だけでなく「学徒勤労動員」の実態調査にも重点をおき「学徒出陣と不可分の関係」と位置付けた予備調査であった。そのアンケート項目は次の通りである。

①学徒出陣・学徒動員の体験をメモして下さい。
記入事項は、勤労動員か出陣か、陸軍か海軍か、配属部隊名、参戦の状況、あるいは所属施設名と任務（仕事）の内容など・自由な形式でメモして下さい。また、戦後体験で思い出に残ることなども、御記入下さい。

②現在でも続いている同窓の会とその連絡先、音信のある同窓生、あるいはこの機会に消息を訪ねてみたい同窓生について、お差し支えない限り、お教え下さい。

③また、戦争体験と立命館を偲ぶ資料・写真類で閲覧・借覧などできるものがあればご連絡下さい。また、そうした資料等で調査すべき所などの情報もお聞かせ下さい。（「アンケート記入用紙」）

しかし、このアンケート調査は、集約過程で困難が生じ完遂できずに今日に至っている。その一つが、「学

徒勤労動員」の調査であった。

その理由について、「学籍簿には学徒勤労動員関係の記録もあるが、学部によって記録があったり、なかったりして、実態把握ができないため」と述べ、調査方法の検討も含め学徒勤労動員の実態調査は課題であるとされた(三)。

その後、学徒勤労動員の実態調査は進められず今日に至っているが、当時実施したアンケート調査の中には、「勤労動員中に四名の学友の犠牲者を出した」と記述されているなど勤労動員中に犠牲となった学生・生徒の事実も明らかになった。

すでに戦後七四年が過ぎた今日、現在の学生達と同世代の青年が、戦死や軍需工場先の空襲や過労で亡くなった事実も忘れさられようとしている。また、すでに、調査からも二五年が過ぎ、各学部や教学機関に残された戦前の非現用資料は散逸し、学徒出陣や勤労動員に関する調査が困難になっていると考えられる。

史資料センターでは二五年前のアンケート調査を見直し、特に勤労動員中に犠牲になった学生、生徒の記録を残すことにした。

見直しの中で、勤労動員先で犠牲になった学生・生徒が九名いることが明らかになった。調査を進めていくと、その犠牲者の死亡原因も必ずしも空襲による犠牲だけではなかった。

勤労先の不衛生な住居環境やひどい食事による病死、また劣悪な労働環境、労働条件の悪さによる過労死など様々な原因によって亡くなっていたことがわかってきた。これらの人たちも勤労動員中の犠牲者としてとらえなおして、どのような環境の中で犠牲となったのか可能な限り明らかにした。

これらの学生・生徒は、勤労動員が通年化(四)された一九四四（昭和一九）年から終戦までの間に犠牲となっていた。本来なら『国家総動員法』が公布（一九三八年）されてから終戦までの立命館学園での勤労動員の実態調査が行われるべきと考えるが、今後に残された課題である。

第一章　豊川海軍工廠空襲による犠牲者

豊川海軍工廠は、海軍兵器の生産を目的に、一九三九（昭和一四）年に開庁した。機銃および弾丸や艦船で使用する測距儀、双眼鏡、射撃装置などを生産し機銃生産に関しては日本最大規模で東洋一の兵器工場であった。

学生たちは主に一九四一（昭和一六）年一二月に新たに設置された光学部で双眼鏡や測定儀、磁気羅針儀などの航海兵器を製造していた。

> わたしは豊川海軍工廠ではフライス盤で長さ一m、直径一〇センチメートル余の鉄管の中央部に七センチメートル×一〇センチメートル位の平面に削る作業でした。その作業は人間魚雷の潜望鏡のレンズにあたる部分を造っていた(五)。

一九四五（昭和二〇）年八月七日に豊川海軍工廠は空襲を受けた。その日の午前一〇時一三分、米軍第三一四爆撃団による最初の空襲が始まり、四爆撃団が三編隊を組み合計三、二五六発もの爆弾が一〇時三九分

までの二六分間に投下された。この空襲は一分間に一二五発もの爆弾が投下されるという言語に絶する激しいものであった。そのため退避命令も遅れ二、五〇〇名以上の尊い命が奪われた。

遺体は第二工員養成所（この第二工員養成所は現在「慰霊碑」の建立されている諏訪墓地付近にあったと考えられる）の庭に並べられた(六)。

この空襲で勤労動員されていた専門部学生四名が犠牲になった。同所で勤労奉仕をしていた友人は、その時の様子をこう語っている。

その爆撃が終わってみたら、立命館の一緒にいた連中が四人おらんということがわかり、早速探しました。私は、相原和男君が私の隣の部屋で寝泊りしていたもんですから、どうしても見つけてやらなあかんと思って、工場の東から西まで三日、四日かけてずっと遺体を探し回りました。空襲が一〇時か一一時ごろでしたから、何も食べずに広い海軍工廠の工場に転がっている遺体をずっと見て回りました。随分沢山の遺体の顔を見ましたが、「違う」「ここにはない」といって必死で探し回りました。結局四人はわからずじまいで、とうとう見つけ出すことができませんでした。本当に遺族の方々にお詫びしたい気持ちです。

豊川海軍工廠の学生たちの寮（第一男子学徒寮）にて

立命館大学昭和二二年専経同窓会「学徒勤労動員と豊川海軍工廠の空襲を語る」

この空襲の犠牲者となった学徒は次の人たちである。

相原和男　石川巌　津野森正　本田義次

なつかしい郷里のお母さん
遠い豊川の地より
お元気で昭和二〇年一月一日の元旦を、お迎え下さる様お祈りします。
何時も思うことはお母さんのことであります。
僕の健康を祈って下さるお母さんお元気で
遠い豊川の生産戦線より　義次　（本田義次の「日記」より）

本田義次は、この日記を記した後、お母さんに会うことなく亡くなった。

愛知県豊川市の諏訪墓地

諏訪墓地に建立された慰霊碑

第二章　東洋高圧工業㈱における犠牲者

一九四四（昭和一九）年、立命館専門学部工学科化学工業科の学生達六八名は、九州の三工場に分かれて動員された。その三工場は、東洋高圧工業㈱大牟田工業所（福岡県大牟田市）三四名、三菱化成工業㈱牧山工場一七名（福岡県八幡市枝光）、日産液体燃料㈱若松工場一七名（福岡県若松市二島）である（七）。

この動員された三工場の一つ東洋高圧工業㈱大牟田工業所では二名の学生が犠牲になった。

その一人は**辻勇**である。辻たちは一九四四（昭和一九）年六月から一九四五（昭和二〇）年六月下旬まで東洋高圧工業㈱大牟田工業所に勤務した。

辻は一九四五（昭和二〇）年五月に過労が原因で死亡したと考えられる。学籍簿には「一九四五（昭和二〇）年五月二七日大牟田ニテ動員中死亡、除籍」と事実のみが記載され、死亡原因が勤労動員中の過労死であったことは記載されていない。同級生は辻の死因が過労死であったと証言している。

「約一年間硫安硫酸（ママ）の製造に従事。辻勇君を病気で失う。食料不足と闘いながら奮闘した。」

勤労動員（昭和19年）を前に化学工業科（旧応用化学科）の仲間たち

（A　昭和二〇年専一電）

「東洋高圧工業にて一名（辻勇）が過労死。製造機械が老朽のため生産量が低下。」

（S　昭和二〇年専一化工）

動員先の労働は、昼一一時間、夜間一三時間の連続無休作業という過酷なものだった。また、食事は満州大豆（粗悪な豆と当時いわれていた）を多く混ぜただけのお粗末な食事であった。そんな劣悪な環境の中で辻は亡くなったと考えられる。

もう一人はHである。

Hは「爆撃（一九四五年八月七日大牟田空襲）で死んだと聞いた[八]」と回想されているが、「立命館の学生ではない」とも言われている。その理由は立命館の学生たちは東洋高圧工業㈱大牟田工業所を一九四五（昭和二〇）年六月下旬に引き上げたので、一九四五（昭和二〇）年八月七日の大牟田空襲には遭遇していないはず、だからHは立命館の学生ではない、との見方[九]である。

しかし、その後発見された資料『督学報告（工学科動員実施調書）』には、小さく尚書として「派遣期間ハ成績良好ナル場合ハ一ケ年間ニ延長予定」と記載されており、動員先で成績優秀者は引き続き勤務することが可能であった。また、すでに勤労動員は通年化しており、Hが一九四五（昭和二〇年）六月以降も残留し、八月七日の大牟田空襲の被害を被った可能性もある。引き続き詳細な調査が必要と考えている。

厳しい勤労動員だったが、動員先ではこんなほのぼのとした逸話も残っている。昭和一九年六月、立命館

専門学部工学科化学工業科の学生T・O（昭和二〇年工業化学科卒）は、日産液体燃料㈱若松工場（現・北九州市若松区）に勤労動員で勤務していた。その時の思い出がある雑誌に掲載されている。

北九州もB二九爆撃機が飛来し、毎日が灰色だった。ある夏の宿舎の灯火管制の下、T・Oさんが弾くマンドリンの「東京娘」（一〇）はわたしの胸にやさしく明かり点してくれた。この若き日の懐かしい思い出の色を今も忘れることができない。

第三章　名古屋造船所㈱における犠牲者

名古屋造船㈱は一九四一（昭和一六）年に設立され、一九六四（昭和三九）年に石川島播磨重工業㈱と合併し、同社名古屋造船所となる。

一九四四（昭和一九）年に名古屋造船㈱で勤労動員中にTは死亡した。その原因は、不衛生な住居環境やひどい食事と過労によると考えられている。同級生だったK・T、M・Tは同社の劣悪な労働環境をこう語っている。

寄宿舎に入って夜の食事に食堂に行きました。豆粕（まめかす）のたくさん入ったご飯が丼鉢につけてあるが、蝿がいっぱいたかっていてとても食べる気がしないが、それでも上の方をすてて中の方を少したべましたが、とてものどを通らなかった。寄宿舎の部屋は蚊がぶんぶん飛び手足、顔までさされて

一晩中蚊との闘いだった。寝不足と空腹、暑さに困惑した。K・T（昭和二〇年専一法）

宿舎は埋立地の用水を飲料水としていたため、入寮すると全員下痢をしたが、診療もしてもらえなかった。全員で会社に待遇改善をもとめますが一向に改善されず、友人のTさんは亡くなった。Tさんが亡くなった日に初めて医師がやってきた。会社側と待遇改善を話し合いますが、一向に改善される様子もないので、全員学校に引き上げました。（M・T昭和二〇年専一法）

学生たちは、会社に労働環境の改善を交渉するがいっこうに改善しない会社に対して憤慨していた。その交渉途中でTは病気で死亡した。この事をきっかけに学生達は「一同ハ此ノ会社ヲ引キ上ゲ」（『学督報告』）ている。学校に引き上げた後、リーダーは退学処分を受け、学生たちの行動に理解を示していた立命館出身の先輩社員も社内の非難を受け、辞表を提出せざるを得なくなった。

学校に引き上げてきた彼らは、すぐに別の会社である愛知時計電機㈱に動員されるが、その動員先の愛知時計電機㈱では、会社の幹部や工員達が名古屋造船㈱での一件を知っており、彼らを白眼視した。さらに、憲兵や特高（特別高等警察）も危険思想を持つ集団としてその動静を監視する。その時の様子を『督学報告』は「立命館学徒ノ状況」として次のように報告（一二）している。

「会社ノ幹部ヨリ工員ニ至ルマデ、名古屋造船ニ於ケル経緯ヲ知悉（ちしつ）シテ事毎ニ白眼視スルト云ウ」、そ

の事実に対して大学側は、「不憫ニシテ涙ヲ催ス程ナリ」と生徒に同情し、生徒たちのとった行為を「名古屋造船ノ不誠意トソレニ依ル学友ノ死ニ同情シテ一時ニ感情ノ激発セルモノニシテ決シテ悪質ノモノニ非ズ」

戦争末期の情勢を考えると大学の学生たちに対する精一杯の弁護だったのかもしれない。名古屋造船㈱のひどい労働環境のために亡くなったTも犠牲者であると考える。

この事件は戦時下の事件としてあまり知られていない。さらに詳細な調査が必要である。

第四章　㈱播磨造船所における犠牲者

㈱播磨造船所は兵庫県相生の村長唐端清太郎を中心に相生の繁栄を図って出資者が募られ、一九〇七（明治四〇）年に播磨船渠㈱として設立され、第一次大戦後一九一六（大正五）年に鈴木商店が買収して㈱播磨造船所となる。一九一八（大正七）年に帝国汽船㈱に合併し、更に一九二一（大正一〇）年には㈱神戸製鋼所と合併し播磨造船工場となる。一九二九（昭和四）年には同社から独立して㈱播磨造船所となり、戦後一九六〇（昭和三五）年一二月に石川島重工業と合併する。

播磨造船所跡付近。当時の造船所は入り江の奥にあったようだ。

『㈱播磨造船所五〇年史』には、勤労動員された生徒たちの様子を次のように述べている。

学徒動員（学徒勤労動員）は国家動員計画の最後のもので決死の段階に入った一九四四（昭和一九）年より各学校の学生生徒が入社した。制服姿の青年学徒が船台上でハンマーやスパナを使い、炎天下あるいは寒風のもとで働く姿はりりしく、また悲壮なものであった。

㈱播磨造船所における犠牲者は、アンケートによって立命館第二中学校の生徒であったことがわかった。立命館第二中学校の勤労動員数は二七八名で、その内訳は三年生一三八名、二年生一四〇名、合計二七八名であった。生徒達の大部分は播磨造船所興亜寮（のちに工和寮）（一一）に入寮し終戦まで勤労動員を続けた。当時、播磨造船所に勤労動員されたK・K（昭和二一年二中）は、次のように回想している（「清和会報一一号」）。

この寮は埋め立地で木造二階建て、満潮時は海水がすぐ近くまで押し寄せてくる劣悪な環境で衛生設備も悪く、また給食はとうもろこし入りの丼鉢一杯と一汁一菜とひもじい思いをした。昭和一九年夏、赤痢が発生し二人の生徒が死亡した。また、同年一〇月鋳造工場で溶解炉のクレーンが転覆し数名の生徒が大やけどを負ったこともあった。昭和二〇年になると再三の空襲があって、終戦まで惨々な日々であった。

この死亡した学徒二名は勤労動員下での犠牲者といえる。調査の結果、この二人はK・OとS・Tと思われ、勤労先の不衛生な環境から赤痢が発生し、その犠牲になったと考えられる。

以上、勤労動員先で犠牲になったといわれていた九名の方々の調査をすすめてきたが、まだまだ真実にとどかない部分もあり、引き続き調査が必要であると思っている。同時に今回の調査が少しでも犠牲者への鎮魂歌となり、学園の記録として残れば幸いである。

注

（一）本学がおこなった「学徒出陣」調査では、全て在学中に兵役に就いたことを「学徒出陣」としており、一九三六（昭和一一）年から一九四五（昭和二〇）年までの期間を調査範囲としている。一般的には一九四三（昭和一八）年一〇月二日に「在学徴集延期臨時特例（勅令第七五五号）」が公布された以降に徴集された学徒を「学徒出陣」と考えることがほとんどである。

（二）『立命館百年史　通史三』第三章第六節世界に向けて平和の発信（p一二二八－一二五七）

（三）「『学徒出陣』等の調査について」（報告）常任理事会運営委員会一九九四年一月三一日

（四）一九四四（昭和一九）年三月七日「決戦非常措置要綱ニ基ク学徒動員実施要綱」が閣議決定され、四月一七日に文部省訓令第一一号「決戦非常措置要綱ニ基ク学徒勤労動員ニ関スル件」がだされる。この訓令は「今や中等学校程度以上ノ学徒ハ挙テ常時勤労ソノ他ノ非常任務ニ服スヘキ」として、学徒勤労動員の通年化を文部省が各学校に命令した。

（五）立命館大学昭和二二年専経同窓会「学徒勤労動員と豊川海軍工廠の空襲を語る」

（六）『豊川市桜ケ丘ミュージアムパンフレット』

（七）立命館『督学報告』立命館は一九四四（昭和一九）年六月に「立命館督学制度」を新設した。この督学制度とは「決戦下ノ学園全般ノ教授、訓育、修練、勤労作業及ビ保健等ノ振興ニ付之ヲ査察、督励シ、（中略）戦時国家ノ緊喫要請ニ綜合統一セシムル」ことを目的として作られた。これにより勤労動員先の実態は毎月報告され、戦時下の限界はあるものの学生、生徒の労働実態、環境衛生などが一部分はわかる。その『督学報告書』は発見され、重要な資料として史資料センターに保存されている。

（八）『むつごろうの歩み　殉難学徒の霊に捧ぐ』（福岡県立伝習館動員学徒の記録）笠間万太編集　一九七七年より

（九）大牟田市では、一九四四（昭和一九）年七月八日未明の米軍B二九が初めて来襲し写真撮影偵察して以来、米軍による空襲は、一一月二一日に三池・通町空襲、一九四五（昭和二〇）年六月一八日未明、七月二七日未明、七月三〇日、八月七日、八月八日、八月八日夕刻と連続的に空襲を受けた。東洋高圧工業㈱大牟田工業所に勤労動員されていた学生達は、一九四五（昭和二〇）年六月一八日の空襲に遭遇しますが、幸い学生達に被害はありませんでした。しかし、大学側は学生達の安全を考慮して六月下旬に京都に引き上げました。したがって『むつごろうの歩み　殉難学徒の霊に捧ぐ』のいう八月七日の大牟田空襲に立命館の学生は遭遇していない、という見方がある。

（一〇）『ジパング倶楽部』二〇一六年六月号　文中の「東京娘」は当時の流行歌である。

東京娘　　作詞 佐藤惣之助、作曲 古賀政男　藤山一郎が歌って流行っていた。

（一一）昭和一九年八月に督学報告マル秘『中京方面出動学徒勤労状況視察報告』（立命館）に「愛知時計電機株式会社」視察報告書がある。その報告書の中で、いかに名古屋造船㈱の医療設備がひどく死亡したTさんが充分な治療を受けることが出来なかったかを、同じように病気になったT・Sさんの例をあげて報告している。

「本校T・Sハ大腸カタルニテ入院シ居レリト聞キ病床ニ之ヲ見舞ヒタルニ、充分手厚キ看護受ケツツアリ、…T・S君ノ父母交々、『名古屋造船ニテ立命館学徒一名死亡セシ時ノ実情ト比較シテ、之ナラバ安心シテ我ガ兒（子）ヲ託シ得ル、名古屋造船ハ誠ニ冷淡ニシテ何等ノ設備モ無ク、御話ニナラヌ会社デアル』ト申シ居タリ」

又、生徒たちが名古屋造船でおかれていたひどい状態と会社の体質についても報告され、抗議をして学校に引き

上げた学生たちの行動を擁護している。

「重役ハ……学徒ノ心理ヲ知ラズ設備モ不完全ニシテ、名古屋地方ノ人々ハ名古屋ノ三大地獄ノ随一ナリト称シ、何人此ノ会社ニ働クヲ欲セズ」のような会社である。このような会社であるため医療設備が不備なため「立命館学徒一名の死亡者ヲ出シタリ、之ニ憤慨シテ一同ハ此ノ会社ヲ引キ上ゲタ者ナリ」

（一二）興亜寮（のちに工和寮）の入寮者は主に勤労学徒、一部一般工員でした。所在地は工場より少し離れた相生市千尋にあり、木造、瓦葺、二階建で、約四六二二坪の土地に一九棟建設されていた。各地から動員された学徒が入寮していたと考えられる。

参考文献

『立命館百年史通史一』

『立命館百年史通史三』

『督学報告』　昭和一九年度　百年史編纂室編纂

『立命百年史紀要二号・別冊』百年史編纂室

『播磨造船所50年史』播磨造船所五〇年史編纂室

『清和会報』一一号（一九九一）立命館清和会

『むつごろうの歩み　殉難学徒の霊に捧ぐ』（福岡県立伝習館動員学徒の記録）笠間万太編集

『大牟田空襲の記録』大牟田の空襲を記録する会

『学制一〇〇年史』文部省

『学制一二〇年史』文部省

『学徒動員・学徒出陣』本間敏矩著